
霧の中で

華月 彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霧の中で

【Nコード】

N43130

【作者名】

華月 彩

【あらすじ】

美形の神主が活躍するヒロイックホラーシリーズ第一弾。千葉の房総半島を中心に行方不明事件が多発している――。まるで神隠しにあったかのような不可解な事件を押し付けられた、神奈川県警の刑事・雲居辰馬は、甥であり神主兼霊能者である青龍堂司を訪ねた。心霊現象であると検討をつけた二人は、早速現場に向けて車を走らせるが、どうしたわけか司の幼い妹である一音輝<ねきくまでがついてきてしまう。司は先祖代々伝わる神剣・青龍刀を手に、不可思議な敵に立ち向かうが――。

うらかな春の午後の出来事であった。

平日の午後だというのに、春の陽気に誘われてか、鶴岡八幡宮には平日にしては多くの人が歩いていていた。良く見ると、大学生らしい若者の姿もちらほらと見える。もう受験シーズンは終わっているはずだから、お礼参りと言うところなのだろうか。

本来なら自分だって春の日差しを浴びながらのんびり散歩でもしているはずだったのだ。――昨日突然押しつけられたいまいましい仕事さえなければ。

赤信号に捕まった愛車のプリメーラの窓から、そんなのどかな風景を眺めて、雲井辰馬は思わずため息をついた。

ハンドルに両腕をあずけ、目の前の赤信号と、横断する歩行者に視線を移す。

そうしながら、仕事と、これから訪ねることになっている甥のことを考える。

雲井辰馬は、今年三十五歳になる、神奈川県警の刑事である。しかし、やや伸びかけの短髪といい、長袖のＴシャツに軽いジャケットを合わせたラフな恰好といい、一見かなり若者らしく見える。さらに彼は口が悪い。その口の悪さと傍若無人さは、一部の同僚や部下には慕われるものの、上司には煙たがられるものらしい。刑事としての腕も悪くなく、空手と柔道は黒帯の腕前であるにも関わらず、この歳になっても平刑事なのは、どうやらそれが深く関係しているようだ。もっとも、当の辰馬にしてみれば、出世のことよりも取り上げられた休暇の方が大問題なのだが。

昨日上司に押しつけられた仕事というのは、最近千葉で多発している行方不明事件だった。

もともと管轄外である事件のお鉢が、なぜ辰馬に回ってきたかという、それは彼の甥せうに關係している。

辰馬の甥である青龍堂司せいりゅうどうつかさは、今年二十三歳という若さで青龍神社の神主をしている。その職業のせい、少々浮世離れた雰囲気を持つている。言葉遣いも物腰も、辰馬とは大違いで、生まれてから一度も敬語以外の言葉を使ったことがないのではと思うほど礼儀正しい。

おそらく、これは母親である美月みづきの成せる技だろう。

美月は辰馬の姉に当たるのだが、旧家の娘にふさわしい、礼儀作法も折り紙つきの、おっとりとした日本美人だ。同じく古く、由緒正しい神社を営む青龍堂家に嫁いだのも、むしろ当然とうなずける。五年前、長女の音輝が生まれた矢先に夫に先立たれ、三十八という若さで未亡人になってからは、自らの教養を活かし、自宅で茶道を教えている。こういった環境で、一人息子として育とうものなら、礼儀も良くなると言うものだ。まあ、それなら辰馬も美月と血を分けた旧家の一人息子なのだが、それはそれ。何事にも例外は存在するものである。

話を元に戻そう。その司だが、どうも生まれつき靈感と言うか、不思議な力を持っているらしい。らしい、と言うのは、辰馬もはつきりとそれを見たことがないからなのだが、実際にそれで依頼もあり、それについて苦情が来た、という話も聞かないところを見ると、あながち嘘ではないのだろう。

そもそも青龍神社とは、その昔平安時代の頃、京を鬼から守るため、封印の意味として建設されたのが始まりなのだそうです。

以前姉の美月が話してくれた話によると、その昔、青龍堂家の先祖で、龍神と人間の女が男子を成したことがあったと言う。その少年には不思議な力があり、ある時京を荒らした鬼をその力で封じ込め、術の仕上げとして、青龍が宿るとされていた、京の東に進み、鎌倉に居を構えたのだそうだ。

だから、青龍堂家の人間には、いくらか龍神の血が流れているの

ですって、と美月は言った。

辰馬は、その話を信じてはいなかった。

司が、風変わりな色の瞳を持って生まれてくるまでは。

とにかく、どこで知ったのか知らないが、辰馬にそんな甥がいることを知った上司に、そっち方面の事件を押しつけられた、と言うわけである。そっち方面、と言うのは、いわゆる心霊現象のことだ。もちろん、当の上司にしたってそんなことをまともに信じているのかどうか怪しいところだが、要は一般常識で片づけるのが難しそうな怪しげな事件をやっかい払いしたい、と言うのが本音だろう。

やれやれ、と、再び深いため息をついたところで、信号が赤から青に変わった。少々ぼんやりしていた辰馬は、慌てて車を発進させた。

大通りを抜けると、人通りがぐっと少なくなる。

何度目かの曲がり角を抜けると、目の前には薄紅色の絨毯が敷かれていた。

青龍神社の前にある、桜並木が、どれも重たげに華をつけていた。降り注ぐ花びらのまだだいぶ向こうに、半ば花びらで埋まった石段が見える。

それは、とても二十一世紀とは思えないほど、浮世離れして美しい光景だった。

石段の手前で左に折れ、そのまま神社の敷地に沿って右に曲がると、左手に塀で囲まれた、立派な平屋建て――青龍堂家――があり、右手に神社の敷地内にある駐車場がある。

5、6台程度しか止められないような小さな駐車場には、司の愛車であるシルバーのビッツが一台だけ止まっていた。元来エコロジストであるらしく、彼はいわゆるエコ・カーしか買おうとしない。

ビッツの反対側に車を止め、駐車場の周りを取り囲むようにある緩やかな坂を登っていく。

坂を登り、社務所の横を通ると、境内に出た。

そこでは、着流し姿の青年と、おかつぱ頭の少女がボール遊びをしていた。

少女が先に辰馬に気がついた。

少女は人形のような可愛らしい顔をぷつとふくらませると、青年に何事か耳打ちし、赤いスカートをひるがえして、ぱたぱたと石段を駆け下りていってしまった。

いつもは辰馬に挨拶ぐらいしていくのだが、今日はお氣に入りの兄と遊んでいるところを邪魔されたのが、よほどお氣に召さなかったと見える。彼女は筋金入りの兄貴っ子なのだ。

「音輝^{ねき}！」

青年がその背中に向かって、呼び止めたが、すぐに諦めたように叫んだ。

「暗くならないうちに帰っておいで」

やれやれ、と言うように肩をすくめ、辰馬の方を振り向いた。につこりと笑みをたたえたその顔には、切れ長の瞳があった。日本人にしては珍しい、深い緑色の瞳が。

二

「お久しぶりです、叔父さん。お元氣そうで何よりです」

につこりと微笑みながら、涼やかな声で青年……青龍堂司は挨拶した。

辰馬もそれに応じる。

「おう。半年ぶりくらいか？お前も元氣そうだな。しかし、お前、相変わらずだな。その恰好。洋服はもう着ねえのか？」

と、司の着流し姿をからかう。司は今年の春、大学を卒業したばかりなのだが、学校に行く時を含め、ほとんど毎日、必ずと言っていいほど和装だった。

司は軽く苦笑いすると、

「おかしいですか？着慣れてみると楽なんですよ。――まあ、とりあえず中にお入り下さい」

と、辰馬を社務所へと促した。

おう、と答えて、社務所の方に向かう。

おかしくはない。むしろ似合いすぎるくらいだ。

瞳の色こそ日本人にはない緑色だが、容貌は東洋人のそれで、しかもかなり整っている。

切れ長の瞳の上の整った眉と言い、すつと通った鼻筋と言い、滅多にお目にかかれない美青年と言えるだろう。しかし、前髪を真ん中分けにした髪型と言い、少々時代錯誤な恰好と言い、何だかお侍のようだ。

そう思うと何だかおかしくなり、辰馬は笑い出しそうになるのを辛うじてこらえた。

社務所内の居間（と言うのだろうか）に辰馬を案内すると、司はそのまま台所にお茶を煎れに行った。居間と台所は、開け放されたガラス戸を挟んで一続きだ。辰馬はすすめられた座布団の一つに腰を下ろした。

日本茶が出されると、礼を言って一口飲み、ため息混じりに口を開く。

「悪かったな。今日は突然呼びつけちゃって」

司はいえいえ、と形の良い手をひらひらさせながら笑った。

「珍しいですね。叔父さんが私に相談事なんて。まさか事件に関してのご相談なら、私はお役に立てないでしょうに」

「それが、そのまさかなんだよ」と、辰馬は頭を抱える。

「実は、俺も昨日初めて聞いた――と言うより押しつけられたんだが、最近千葉の方で行方不明事件が多発しているんだ」

「千葉？叔父さんは神奈川県警なのだから、管轄が違うのではないですか？」

司が怪訝そうな顔で尋ねる。

「どうもこうも、お前のせいなんだよ。どっから漏れたんだか、俺に神主で拝み屋の甥がいると知った上司が、こんな管轄外の仕事まで押しつけてきやがんの。それさえなきやあ今日は非番だったのによ」

司にしてみれば、はつきり言っただ辰馬のぼやきはお門違いなのだが、それに怒る様子も見せずに言った。

「と、言うことは、そういった事件と言うことですか？」

「当たり前だろ……まあ、冗談はさておき、事態はかなり深刻なんだ」

辰馬は急に真顔になり、事件について語り始めた。

事の始まりは一週間程前、千葉県房総半島を中心に大きな地震があったことに始まる。

幸い、建物などの大きな倒壊はなく、怪我人が数人出た位ですんだため、それほど大きな騒ぎにはならなかった。

しかし、地震があった翌日、千葉県警に一本の電話が入ったのである。

電話の主は川崎市に住む主婦で、昨日到着する予定だった娘夫婦が帰ってこない、というものであった。

よくよく話を聞くと、ルートの丁度震源地である房総半島周辺の、海沿いのコースを辿る予定であったから、何かあったのでは、とすぐに捜索活動に向かった。

しかし、その警官達も戻ってくる気配がない。

さらに数人の警官が出向いたが、彼らも戻る気配もなかった。

いつしか、誰からともなく「神隠しにあったのではないか」と迷信めいた事を言い出すものまで出てきた。

「まあ、そう言った理由でこれ以上誰か差し向けるわけにもいかない。かといって既に一週間以上経っているからには、その娘夫婦に何かあったと考える他ない。既に出向いたまま戻ってこない警官にしても同様だ」

そこまで一気に語ると、出された日本茶をぐびり、と飲んだ。

「俺を含め、警察官は基本的に現実主義者の集まりだ。だが、これはそう言ったもんじゃねえと思う。どちらかと言えば警察じゃない。お前の領分だ。そこで、お前の力を借りたい」

司は黙って辰馬の話を聞いていたが、そこまで話し終わるのを聞く、わかりました、と答えた。

音輝は青龍神社の石段の一番下に腰掛け、ボールを上放り投げでは受け止める、ということをし繰り返していた。

兄には公園で遊んでくる、と言い置いて来たけれど、何となく公園に行く気にもなれず、今日は家で母が茶道教室を開く日だから（もともと茶室は広い屋敷の離れにあるのだが）家に帰る気にもなれず、仕方なしに一人ボール遊びに興じているわけである。

何か、面白いことないかなあ。

ボールを空高く投げあげながら、音輝は考えるとはなしに考える。辰馬おじちゃんは何で来たんだろう？そう言えば、仕事のことと相談に来るとかお兄ちゃんがお母さんと話していたっけ。

ぽす、とボールを両手で受け止め、再び投げあげる。もっと高く、もっと高く。

空に吸い込まれていくボールを眺めながら、また音輝は考える。辰馬おじちゃんの仕事で、お兄ちゃんが必要なってなんだろう？もしかして、おはらいとかするのかな？

今までに何度か色々な人が、兄に仕事の依頼に来ていたことを音輝は知っている。そして、それが「お被い」であることも。最も、辰馬が来たのは初めてだけれど。

おはらって、何するんだろう。

高さが上がった分、少し勢いの増したボールが戻ってきたので、音輝は慌てて受け止めた。今までよりもズシンと衝撃が加わったので、少しよろけた。

音輝はボールを投げあげるのをやめて、両手でボールを挟むよう

に持って眺めた。今年兄に買ってもらったばかりの黄色いボールは、もうところどころ汚れている。

そう言えば、音輝は兄が仕事をしているところを見たことがなかった。と言うのも、司が仕事をしている時、音輝を絶対に側に来させなかったからだ。

なんでえ？と音輝がぐずっても、兄は音輝の頭を優しくなでて、危ないから、と言うだけだった。

なんで危ないんだろう？見てみなきゃ危ないかどうかわからないもの。よし、今日はこっそりついていってみよう。

音輝はボールを抱えたまま、勢いよく立ち上がると、駐車場の方向に向かった。

音輝の、不思議と良く当たる勘は、今日二人が車で出かけることを告げていた。

どっち？お兄ちゃんの車？それともおじちゃんの車？

音輝は自分に聞いてみる。

今日は辰馬の車で出かけるような気がした。

音輝は迷わず、辰馬の車のトランクを開けた。もともと、もしこれが司の車だったら、いつもトランクの鍵を忘れずに掛けていただろう。が、今日の音輝は運が良かった。辰馬のトランクはすんなりと空いた。他人事ながら、警察官がこんな不用心で良いのかしら？と思ってしまう。

トランクの中には、折りたたみの自転車やら、寝袋やら、色々なものが押し込められていたが、荷物をちよつと寄せれば音輝が入る隙間くらいはありそうだった。音輝は迷ったあげく、駐車場脇の草むらの隙間にボールを隠すと、辰馬のトランクに忍び込み、ふたを閉めた。

暗闇の中でしばらく待っていると、ドアを開け閉めする衝撃と、鈍いエンジン音がした。車が走り出したらしい、軽い振動が伝わって、音輝は思わず小さくガツポーズをした。が、喜びもつかの間、今度はトランクの中のありとあらゆるものが音輝の身体にぼこぼこ

とぶつかつた。

着く前にこぶだらけにならなければいいけど。痛みに顔をしかめながら、何とか手近にあったタオルを身体に巻き付けると、少し衝撃が和らいだ。一度荷崩れを起こした荷物も、収まるべきところに収まつたらしい。そうになると、周囲の暗闇も手伝つてか、音輝は深い眠りの底へと落ちていった。

三

世間一般の霊能者と言うものは、誰も彼も風変わりな服装を好むものなのだろうか。

司をプリメーラの助手席に乗せ、自らはハンドルを握りながら、辰馬はそんなことを考える。

あの後、支度をして来ます、と言いおいて、しばらく経つて戻ってきた司は、今度は白地の着物に浅葱色の馬乗り袴と言う出で立ちであつた。おまけに、黒い手提げ袋の他に、やけに細長い革袋を背負っているのだ、それは何だ、と尋ねると、こともなげに、刀です、と答えた。おいおい、銃刀法違反に引つ掛からないのか。辰馬の心配をよそに、大丈夫ですよ、お被いに使う神剣です。一応免許も携帯していますし。とにっこり。

日本刀を所持するためには、それ相応の免許がいる。まあ、確か司は居合もやっていた筈だから、その辺は問題ないだろう。

ますますもつて時代錯誤な若者の前を歩きながら、辰馬はそんなことを考えた。

今日は辰馬の車で行くことになった。荷物を後部座席に入れ（辰馬はトランクはほとんど物置として使用しているのだ）、エンジンをかけた。

出発してから、既に三十分ほど経過していた。

ちらりと横目で甥を見ると、腕を組み、うつむいたまま、考え事をしているらしい。しばらくずつとこのスタイルである。

なあ、と声をかけると、そのまま、はい、と反応した。

「お前、あの事件についてどう思う？」

司は相変わらず伏し目がちのまま、淡々と答えた。

「そうですね。今はまだ何とも言えませんが、行方不明事件が多発しているのは海沿いの道路と言うことですから、それが関係しているのではないかと思います」

辰馬は前を向いたまま、ふん、と相槌を打つ。

「海や川等の水辺には、古くから多くの神々が棲むと同時に、人の屍肉を好む、下等な妖魔が多く棲んでいます。夏になると、海水浴等で海辺に人が集まりますが、水難事故も増えるでしょう」

辰馬は甥の話に耳を傾けながら、ああ、と答える。

「全部が全部そうだとは言い切れないのですが、それは水辺に棲む妖魔の仕業である事がほとんどなのです。ですから、今回の事件もそう言ったものの仕業ではないかと思っています」

辰馬は甥の話を、半信半疑で聞いていた。しかし興味深い話ではある。

「それと、これは私の勘なのですが、今回は何か予想外の出来事が起こりそうな気が……」と、突然そこで言葉を止め、黙り込んでしまった。

どうした、と横目で相手を見ると、珍しく驚いたような顔をしていた。

「まさか……」と呟いて上半身をひねり、後部座席の方を見る。その顔色は、少し青ざめているようだった。

「叔父さん、唐突なことを伺いますが」

何だ？と促す。

「今日、トランクの鍵は閉めてありました？」

本当に唐突だ。

「閉めた……と思うが。それがどうした？」

司は尚も上半身をひねった体勢のまま後ろ……正確にはトランクの方……を凝視していた。

「本当に？それは確實ですか？」

その、珍しくせつぱ詰まったような様子に、辰馬は思わず吹き出した。

「面白いことを聞くな。俺、トランクは物置代わりにしてるから、滅多に使わねえしなあ……。ああ、そう言えば昨日荷物をちつと整理して、そんでその後は勿論ちゃんと……。あれ？」

閉めたっけ？そう言えば、ちょうど両手が塞がってたから――

――

「閉めてない、かも」

と言うと、司はそのままがつくりと脱力してしまった。

ここまで取り乱してる甥を見るのは珍しい。辰馬は少し得した気分になって、思わずにやりとした。

そんな辰馬とは対照的に、司は呻くように言った。

「叔父さん、すみません。トランクを開けていただけませんか？」

不意に襲った振動で、熟睡していた音輝の身体にまた何かが当たった。

痛みに顔をしかめて目を開けると、真っ暗だ。

驚いて、ここはどこだろう、と思わず跳ね起きると、今度は天井らしきものに、したたかに頭をぶつけてしまった。

「痛ッ！」

思わず頭を抱えてうずくまる。落ち着くと、ようやくここが車のトランクの中であることを思い出した。今起こった振動は、車を止めるためのものであったらしく、しばしの細かい振動の後、ぶつとりと止まった。

（と、言うことはもう着いたのかな？）

頭をさすりながらそんなことを考えていると、不意にトランクが開いて光が流れ込んだ。

音輝は思わず顔をしかめたが、すぐに目が慣れた。

光を背に、珍しく怒った顔の兄が立っていた。

四

「まったく、仕事だからついてくるな、といつも言っているのに」
後部座席に音輝と並んで腰掛け、再び走り出すと、珍しく仏頂面で、司が言った。

「・・・ごめんなさい・・・」

バックミラー越しに後ろの様子を見ると、音輝が小さい身体をさらに小さくしてうつむいていた。

司は、と言うと、窓枠に左肘で頬杖をついている。

視線は窓の外に向けられ、音輝の方を見ようもしない。

「まあまあ。いいじゃねえか。どのみち今日は姉さんは茶の湯の稽古だろ？」

重苦しい車内の雰囲気はどうにかしようと、わざと明るい声を出したが、すぐに司の不機嫌な声がかぶさった。

「だからって、家にいないわけじゃないでしょう！」

珍しく眉をつり上げ、後部座席から身を乗り出して辰馬に食ってかかる。が、すぐに正氣に戻ったらしく、小さく「すみません」と言った。

そして、ふうーっと長い息を吐きながらシートに倒れ込むと、左手で頭を抱え、呻くように言った。

「私がうつかりしていました・・・。もつと早く気づいていれば、家にとつて返すことも出来たのですが、考え事をしていたもので・・・」

「そこまで言うとは、また深いため息をついた。」

「お兄ちゃん、ごめんなさい。音輝ならおとなしくしてるから・・・」

「おろおろと司の着物の袂をつかむ。」

「司はしばらく無言のまま頭を抱えていたが、やがて諦めたように言った。」

「まあ、仕方ありません。今から戻るわけにはいきませんし。本当はどこかに託児所でもあれば預けていきたいくらいなのですが・・」

その言葉を聞くなり、泣きそうだった音輝の顔がぱつと明るくなり、満面の笑顔で司に抱きついた。

「お兄ちゃん、ありがとう！」

司は困ったような顔で、はいはい、と良いながら何とか音輝を引き剥がそうとし、尚も首に巻き付かれながら、申し訳なさそうに言った。

「本当にすみません、叔父さん。そういうわけで一人増えてしまいました」

辰馬はまるで親子のような兄妹のやりとりに、思わずくつくつと笑いながら、左手をひらひらさせ、別にかまわねえよ、と言った。

「それよりもさあ。ちよつくらどこかで休憩しねえ？俺、ずっと運転してるからくたびれてきた」

司もようやく微笑つて、

「そうですね。それではそのレストランにでも入りましょうか？」と、近くのレストランを指した。

ランチタイムが終わったばかりで、店内はほとんど空席だった。

三人は窓際の席に腰掛けた。司の隣には音輝が腰掛ける。

ウェイトレスが注文を取りに来たので、司と辰馬はブrendコーヒーを、音輝はクリームソーダを注文した。

ウェイトレスは注文を受けながら、不思議そうな顔で司ら三人を盗み見ている。

どうやらこちらのメンバーの様子がよほど珍しいらしく、厨房に入ってから、何となくこちらの様子を伺っていた。

無理もない。侍のような恰好をした若者と、それと対照的に今風の恰好の中年男と、親子ほども年の離れた少女という取り合わせだ。司一人だけでとんでもなく目立つというのに、これでは注目するな、

と言う方が無理な話だろう。

飲み物が運ばれてくる前に、司が店の電話を借りて席を立った。携帯電話全盛期の今になっても、彼は携帯電話を持たない。最近はずいぶん公衆電話が減ったから、そろそろ不便なのではないだろうか、と辰馬は思うが、本人は特に必要性を感じてはいないようだ。まあ、だいたい家か神社にいる上、お互い目と鼻の先の場所だから、その必要もないのだろう。

司がいなくなると、とたんに音輝が声をひそめて辰馬に質問する。「ね、ね、おじちゃん。おじちゃんの事件って何？どんな事件なの？」

子供は好奇心のかたまりだ。テーブルから身を乗り出し、興味津々という言葉を描いたような顔で、辰馬の顔をじっと見る。

そのあどけない様子は、思わず何でも教えてやりたいような気にさせるが、辰馬はにっと笑って、

「よし、後でな。車の中で教えてやるから」と、なだめた。

笑顔でうん、と頷く音輝は、素直で本当に可愛い。兄貴恋しさゆえに、時々今日のような我が儘にもなるけれど。

司が戻ってきた。

「母に電話してきました」と、腰を下ろす。もう機嫌は直ったようだ。

「お二人で何を話していたのですか？」と、いつもの笑顔で尋ねる。音輝がちよつと答えにくそうな顔をしたので、辰馬は笑って、

「車に戻ったら音輝の質問責めが待ってるから覚悟しとけ」とだけ言った。

司はちよつと困ったように苦笑いすると、

「音輝、遊びに来たのではありませんよ」とたしなめた。

飲み物が運ばれてくると、音輝は美味しそうにアイスクリームを食べ、ソーダを飲んだ。司と辰馬も、コーヒーと共にしばしの休息を味わった。

飲み終わり、音輝が「ごちそうさま」と言うと司が、

「音輝。口にクリームがついてる」と言っ、おしぼりで拭ってやる。

その様子は本当の親子のようだったので、辰馬はつい、

「お前も良い父さんになったな」とからかった。

本人は、やめてくださいよ、と照れたように笑ったが、実際親子のようなものだ。年が離れていることもあるが、彼ら兄妹の父親は、音輝が生まれて一年ぐらい経ったときに病気で亡くなっている。父親の顔を知らない音輝は、司を半分父親として認識しているのかも知れない。

五

車に戻ると、鞆の中から司が紙切れのようなものを取り出し、辰馬と音輝に渡した。

なにやら、漢字のような、図形のような物が書いてある、細長い紙である。

「それは魔除けの護符です。絶対に手放さないように、ポケットにでもしまっておいて下さいね」

人差し指を立て、辰馬と音輝の目をしっかり見ると、では、参りましょうか、と座席に深く腰掛けた。

「ねえ、お兄ちゃん、どうやって退治するの？」

車が走り出すなり、早速音輝が聞いてきた。

司は、やれやれ始まった、と言うように苦笑いをしたが、どのみちこれから行動を共にすることになるのだから、と左腕に抱えている刀袋を指し示した。

「この刀を使うんです。これは青龍刀と言う、うちに昔から伝わる刀で、これを使うことで龍神の力を借ります。ただし、私以外の人がこの刀を抜くと、龍神の力に身体が耐えきれなくなってしまふ、と言われています。だから、音輝もこの刀には決して触らないよう

に。もしもの事があつたら大変だからね」

音輝は興味津々といった風で刀袋に見入り、お行儀よくはい、と答えた。

さらに尋ねる。

「ねえ、お兄ちゃんは今までにその刀を使ったことがあるの？」

司は右手の人差し指を唇に当て、考え込むように窓の外を眺めた。いつの間にか、外は土砂降りの雨が降っている。

「何度か・・・ね。話の通じる霊なら問題ないでしょうが、今回は使う事になるでしょう」

音輝はさらに事件について尋ね、司がそれを説明してやっているうちに、車は県境を通過し、千葉県に入っていた。

海沿いの道に出ればすぐに房総半島に差し掛かるはずだ。

しかし、未だに海沿いの道にすら着く気配がない。

司はもしもの時に備え、青龍刀を袋から出して腰に差しながら辰馬に尋ねた。

「叔父さん、まだ着かないのでしょうか？そろそろ海沿いの道に出ても良いと思うのですが」

辰馬も言われて初めて奇妙なことに気づいたようで、首を傾げている。

「そう言えばおかしいな。迷ったかな？」

「何か、目印などありますか？」

「ああ、房総半島に差し掛かる前に、トンネルを通るはずだ。そろそろ着いても良さそうだが」

「お兄ちゃん、気持ち悪い・・・」

弱々しい音輝の声に振り向くと、普段車酔いなどしない彼女が真っ青な顔をしてうずくまっていた。

「叔父さん、車を止めてください」

言われてすぐ、車を道路脇に止めてエンジンを切った。

「どうした音輝、車酔いか？」

振り向くと、司は音輝を安心させるように抱きかかえていた。

「いえ、音輝は滅多に乗り物酔いはしないんです……ところで、雨止みましたね」

言われてみると、つい先程までうるさく降っていた雨が、嘘のように止んでいる。

まるで、屋根のある所に入ったかのように……急に悪寒を感じた。

「おい、司。もしかしてここは……」

慌てて再び後ろを振り向いた辰馬が見たものは、空になった後部座席だけだった。

六

「おい、司！音輝！どこにいる！」

辰馬はエンジンを抜くと、すぐに車から飛び降りた。

まさか、二人とも消えてしまったのだろうか。

他の行方不明者と同じように、神隠しに……

いや、まさかそんなはずはない。

辰馬は不吉な考えを打ち消すように、慌ててかぶりを振った。

辰馬は二人の名を呼びながら、あてどなく道を走った。

「おかしいな、ここは一体どこなんだ」

息を整えつつ周りを見ると、いつの間に立ちこめていたのだろう、周囲は濃い霧に包まれ、一寸先も見渡すことができなくなっていた。さつき走り出した所からほとんど経っていないのに、自分の車すら見えない。

自分の立っている足元すら、既にミルク色の霧が立ちこめ、どんな所に立っているのかすらもわからない。

携帯電話は持っていたが、二人とも持っていないのだから連絡する術もない。

こう言った時は、うかつに動かない方が良い。

そう思った時、ふと前方の霧が割れた。

見慣れた、小さな影が立っていた。

「音輝・・・」辰馬は思わず安堵のため息をついた。

ついさっき、自分で思った事も忘れ、音輝に駆け寄ろうとする。

と、ふいに上着の裾が引つ張られた。

振り向くと、今自分が向かおうとしていたのと全く同じ姿で、音輝が必死の形相で辰馬のジャケットの裾を掴んでいた。

「おじちゃん、あっちにいつちゃ駄目。戻ろう」

「音輝！？本物か？」

するとあれは――――

恐る恐る後ろを振り向くと、音輝は先程のまま、あどけない笑顔を浮かべてたたずんでいる。

と、その貼り付けたような笑顔がびしり、と割れ、黒い、どろどろとした物があふれ出した。

それは無数の手を持つ泥細工のようであり、蛇のような無数の触手を蠢かせながら、辰馬たちの方をめがけ、ゆっくりと前進してきた。

こっちに来る――――！

辰馬は音輝を小脇に抱えると、脱兎のごとく走り出した。

どれほど走っただろうか。

上着を来ているため、中のシャツは汗だくになっていた。喉がひりつく。

しかし、すぐ後ろまであの化け物が追ってきているかと思うと、立ち止まることはできなかった。

音輝が何事か叫んだ。

止まれ、と言っているようだった。

しかし、その言葉の意味を解する前に、辰馬の右足が空を切った。辰馬はどこへともなく落ちていく感覚に悲鳴を上げ、音輝を抱えたまま、観念して目を閉じた。

ふいに落下が止まった。

底に着いたのではない。上から引き上げられているようだ。

恐る恐る見上げると、誰かが辰馬の右腕を掴んでいた。

さらに上を見上げ、辰馬は我が目を疑った。

霧に透けてとぐろを巻いた伝説の聖獣がそこにいた。

「龍・・・？」

風が吹いた。

霧が流れていく。

霧に透けた聖獣の影は風になびいて消え、

見慣れた袴姿がそこにあつた。

「司か・・・」辰馬は安堵で力がゆるむを感じた。

「叔父さん、音輝をしつかり捕まえといてくださいよ」

慌てて音輝を抱えた左腕に力を込め直す。

途端、ぐい、と右手に力が加わり、引き上げられると、辰馬は思

わずそこにへたり込んでしまった。

「・・・助かった」

音輝は司を見ると、安堵のあまり泣き出してしまった。

しかし、音輝にかまう間もなく、辰馬は司のすぐ後ろに黒い塊が迫って来ているのを見た。

「司！後ろ！」

辰馬が叫ぶのと、司が後ろを振り向くのと、ほとんど同時だった。司は素早く腰に差した刀を鞘ごと引き抜くと、顔の前で両手で構えた。

その途端、電流のような閃光と共に、司めがけて伸びた触手がはじかれた。

司は胸の前で印を結ぶと、素早く何事か呪を唱えた。

「叔父さん、音輝、先程渡した護符は持っていますね」

たった今自らが唱えた呪により、苦しげに蠢く塊を見据えながら、あくまで落ち着いた声で言った。

辰馬が、ああ、と答えると、司はよろしい、と言うように頷き、

二人の方を見ずに言った。

「二人とも絶対にそこを動かないでください」

司はなおも蠢きつつ、徐々に動きを取り戻しつつある塊に対峙すると、両手で青龍刀を捧げ持ち、刀の鯉口を切った。

と、雷のような衝撃と共に、光の柱が彼の全身を包んだ。

その光の柱は、龍神そのものが彼の身体に乗り移る姿だったのか。吸い込まれるように消えた光の柱の後に残った者は、いつものおっとりとした青年ではなかった。

端正な姿であることは変わらない。

しかしその容貌は美しいが氷のように冷たく、それでありながら目を離さずにはいられない、引きつけられるような魅力を放っていた。

女性のように美しく、男性のように力強い。

男でも女でもない、性別を超越した、ただただ神々しく光り輝くものがそこにあった。

黒い塊が突然動き出した。

司に向かい、獲物を捕らえようとするかのように触手を伸ばす。

司はすらりと刀を抜き払うと、自分に向かってきた触手を躊躇なく切り捨てた。

切り裂かれた腕は悲鳴をあげて霧散する。

しかし、無数にある触手は司を取り囲むようになおも襲いかかる。司が円を描くように刀を振るい、触手をなぎ払う。

今度は司めがけ、真上から触手が伸びた。

彼はひらりとそれを避け、襲いかかってきた腕を切り裂く。

触手はなお司に襲いかかるものの、その勢いは最初程ではなかった。

一つの塊に見えたものは、無数の触手が合わさった姿だったのか。見ると、消えて言った触手の根元から、わずかに光が漏れ初めていた。

その隙間は司が触手を切り裂く度に徐々に広がり、何であるかが明らかになった。

それは、無数の人間の顔であった。

おそらくは、行方不明となっていた人のものであるう。

彼らは触手に絡め取られ、苦しげに表情をゆがめつつ、外に向かって必死に助けを求めるように声にならない叫びを上げ続けていた。

司は尚、襲いかかる触手を切り裂いていた。

無数にあった触手は徐々にその数を減らし、次第にその全貌が明らかになりつつあった。

それまで触手しか見えなかったが、その頭上には瘤のような塊があった。

司はそれを見るなり、それがこの奇怪な塊の急所であると見て取った。

彼は左足で大きく踏み切ると、助走もなしに高く飛んだ。

それは、まさに龍が天を駆け上る様に似ていた。

司は瘤の傍らに降り立つと、その瘤に青龍刀を突きたてた。

- - - 途端。

黒い塊は爆発霧散し、無数の光の珠が飛び立った。
その光は、触手に絡め取られた人間の魂だったのか。
それは、礼を言うように司の周りをしばし飛び交い、やがて天高く飛び去った。

司は光が飛び去った空を、しばらくの間見守っていた。

八

戦いが終わると、司は青龍刀を鞘に納めた。

その途端、彼を包んでいた光は消え、いつもの穏やかな青年の姿に戻った。

先程まであれほど立ちこめていた霧は、どこへともなく消え去っていた。

司が音輝の方に駆け寄る。

音輝がだっこをせがむように両手を伸ばすと、よしよし、と言いながら彼女を抱き上げた。

「叔父さん、怪我はないですか？」

辰馬の方に向かいながら、心配そうに言う。

辰馬はああ、と答え、何気なく後ろを振り向き、愕然とした。

辰馬のすぐ後ろは、海に面した断崖であった。

ガードレールは地震のためか途中から崩れ落ち、全くその役割を果たしていない。

もし、あの時司が引き上げてくれなかったら………と思うと思わず鳥肌が立った。

司はしがみつく音輝を見やり、困ったように言った。

「叔父さん、音輝を車に置いてきます。鍵を貸して頂けますか？」

辰馬はしゃがみこんだまま呆然と、ああ、と答え、車の鍵を差し出した。

司は礼を言い、音輝に周りを見せないようにしっかりと抱きかかえながら鍵を受け取ると、音輝をなだめすかしながら車の方に向かった。

ようやく頭がはつきりしてきたので、辰馬はそろそろと立ち上がった。

そして、自分が落ちるはずだった崖の下を見た。

辰馬は、司が早々に音輝をこの場から引き離したこの意味を知った。

崖の下には、おそらく行方不明となっていた人のものであるう、無数の屍が血を流し、折り重なるように累々と積みあげられていた。「叔父さん」

突然後ろで声がしたので、辰馬は飛び上がるほど驚いた。

司が音輝を置いて戻って来ていた。

司は怪訝そうに、大丈夫ですか、と尋ねると、辰馬に鍵を返した。そして辰馬の隣に立ち、崖の下を見ると悲しげに眉をひそめ、

「音輝が見なくて良かった」と呟いた。

ああ、と応じる辰馬に、司はさらに言った。

「音輝を置いてくる時に見たのですが、トンネルにあった私たちの車の回りに無数の車が乗り捨てられていました。中にパトカー等もありましたから、おそらく彼らのものでしょう。私たちが見せられたような幻を見、そしてここから身を投げた――」

「あれは、幻だったのか？ いや、そもそもあれは何だったんだ？ 俺には車を止めた途端、お前と音輝が消えたように見えた」

司は、ええ、と頷く。

「あれは、幻を見せる力を持った、妖魔の一種です。おそらくどこかに封じられていたものが、今回の地震で封印が解け、力を持ったのでしょうか。あの時、私も音輝も後部座席にいたのです。しかし、叔父さんが私たちの名を呼びながら外に出てしまったので、私は音輝に車内で待つように言い、車を降りたのです。音輝は勘の鋭い娘ですから、叔父さんの身に危険が迫っている事を感じたので

しょう。私の言いつけを破って、叔父さんを探しに行ったんですね」
辰馬が頷く。

「あの時、俺は霧の中で音輝の姿を見た。それに向かおうとした時、音輝が突然後ろから現れて、引き留めてくれたんだ。あのまま偽物に向かっていたらと思うとぞっとする」

「それを考えると、音輝がついてきてしまったのも、神の思し召しだったのかもしれないね」司は苦笑いすると、話題を打ち切るように、さて、と言った。

「では叔父さん、後はお願いしてもよろしいですか？」

辰馬が、ああ、と応じると、では、よろしくお願いします、と言
い、踵をかえず。

ふと、辰馬が呼び止める。

「司」

「何でしょうか」言いながら振り向く。

「崖から落ちたとき、助けてくれてありがとうな」

「いいんですよ」笑って答える。

「ところで……こんな事を言っておかしいと思うかもしれないが、あの時、お前の姿が、一瞬違うものに見えたんだ。龍みたい
に。あれも幻だったのか」

司は人差し指を唇にあて、少し考えこむように間をおくと、そう
ですねえ、と口を開いた。

「叔父さんは聞いたことがあるでしょうか。私の祖先で、龍神と人
が子を成したことがあると」

辰馬が、ああ、と頷く。

司が、ゆっくりと辰馬の方へ戻りながら言う。

「平安時代の頃でしたか、京を鬼が荒らしたことがあったと言いま
す。その時、その子供……ちなみに男の子だったわけですが
……は鬼を封じた後、鬼封じの儀式の仕上げとして、京の東
の、鎌倉の地に流れたのだと言われています。そして、彼が愛用し
ていたのが、この青龍刀であると」

司は辰馬の隣に立つと、地平線を眺めながら、続けた。

「青龍堂家は、その少年の血を引く家なのです。ですから、もしかしたら私の血の何千分の一かは、龍神の血が流れているのかもしれませんがね」

珍しく、いたずらっぽい微笑を浮かべてそう言つと、では、言つてまた車の方に戻つていった。

辰馬は、たつた今聞いた司の言葉を反芻していた。

あの化け物と戦っていた時、確かに司はいつもと様子が変わっていた。

あれは、彼らの祖先たる龍神が、彼に乗り移った姿だったのだらうか。

もしかしたら、司の珍しい瞳の色も、神の血が色濃く受け継がれた証なのかもしれない。

夕日が沈んでいく地平線を眺めながら、しばらくそんな事を考えていると、ふと現実の世界が懐かしくなってきた。

辰馬は胸ポケットの携帯電話を探り当てると、千葉県警の番号をプッシュした。

それからが大変だった。警察が到着するなり、辰馬は事態の説明を求められ、早速返答に窮した。一体どうやって説明するべきか。しかし、現場の指揮官として、辰馬にこの仕事を回した張本人である一西園>にしぞのく警部があり、事なきを得た。

辰馬は普通警察官に話したら鼻で笑われてしまいそうな出来事を話したが、警部は真面目に頷くと、わかった、後はこちらで上手く片づけよう、と応じてくれた。

そんなこんなで、ようやく解放された時には既に七時を回っていた。

やれやれ、とため息をつき、首筋を伸ばしながら車に戻ると、「待たせて悪かったな。帰るぞ」と、言った。

しかし返事がない。

怪訝に思つて後ろを見ると、無邪気に眠る音輝に寄り添うように、司がぐっすりと眠りこんでいた。

龍神の力を借りる、と言うことは、こんなにも疲れることなのだろうか。

無防備に寝息を立てる、年の離れた兄妹の姿を見ていると何だか微笑ましくなり、辰馬は二人を起こさないようにゆっくりと車を動かした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4313o/>

霧の中で

2011年2月28日19時25分発行